

2005 年度卒業論文

## 社会起業家的思考のまちづくり

名古屋市立大学人文社会学部人間科学科

024002 阿部沙織

指導教官：成玖美

# 目次

はじめに	・・・	1
第一章 まちづくりの流れとその意義		
第一節 まちづくりの始まりと変遷	・・・	4
第二節 近年のまちづくりの動きと展望	・・・	5
第二章 社会起業家と社会起業家的思考		
第一節 社会起業家の発祥	・・・	7
第二節 社会起業家とは	・・・	7
第三節 社会起業家のインパクト	・・・	10
第三章 社会起業家的思考と活動の拡がり		
第一節 特定非営利活動法人エティックと社会起業家支援活動	・・・	14
第二節 名古屋における社会起業家支援活動－Will Platform	・・・	15
終章 これからのまちづくりにおける社会起業家的思考の可能性	・・・	22

## はじめに

近年、全国各地において「まちづくり」という言葉をあちこちで目にするようになった。戦後間もなく、国家主導・官僚主導の官治的都市計画に対する住民・市民の多様な対抗運動の中から生み出されたこの「まちづくり」という言葉はその後次第に意味の幅を広げ、現在は地域再生や福祉活動、防災対策など、様々な分野で使われている<sup>1</sup>。20世紀の日本では、こういった分野のサービスは行政が大きな役割を担っていた。行政が、医療、福祉、教育といった公共サービスを提供し、地域社会が行政の方針の受け皿となり、市民はそれに依存するという体制が続いていたのである。しかし、全国的に画一的な都市整備が進められて地域の環境・歴史・文化などの地域特性が失われ、また都市人口の急増に伴う環境破壊が進む中で、良好な生活環境を実現する上で、中央集権的な都市計画制度には限界があると言われるようになった。また経済社会が成熟し、価値観が多様化する中で、公平性、中立性を前提とする行政だけでは、今の社会に対するニーズに応えることが難しくなってきたのである。

このような時代の流れの中で、行政主導・行政依存型の地域づくりから、市民主導のまちづくりへと転換していく動きが、年々高まってきている。市民が主導となり、市民、行政、企業それぞれが必要な役割を担うというシステムが求められてきている。そもそも「まちづくり」という言葉は、「都市計画」のような官僚的な法律用語ではなく、だれにでも理解しやすい市民的な用語である。一般市民に親しみやすく、身近に感じられる「まちづくり」という言葉が世間に普及しているという現象もまた、地域づくりが市民主体のものになりつつあることの表れであると捉えることができる。更に近年はコミュニティ・ビジネス<sup>2</sup>という、更に主体的な部分が強まった取り組みも広がってきている。

現代のまちづくりについて、田村明は全国各地のまちづくりの実践を検証しているが、これまでのお上が都市や地域をつくり、市民は不在であるという状態から、市民主体に切り替えようとするのが望ましい「まちづくり」の能動的な姿であると述べ、

---

<sup>1</sup> 白石克孝・富野暉一郎・広原盛明『現代のまちづくりと地域社会の変革』学芸出版社、2002年

<sup>2</sup> コミュニティ・ビジネス―「地域コミュニティで今まで眠っていた労働力、原材料、ノウハウ、技術などの資源を生かして、地域住民が主体となって、自発的に地域の問題に取り組む、やがてビジネスとして成立させていくコミュニティの活性化と、元気づくりを目的にした事業活動」と定義されている。（細内信孝『地域を元気にするコミュニティ・ビジネス』ぎょうせい、2001年、p.35より）詳しくは第一章で説明する。

市民主導によるまちづくりの実践の必要性を主張している<sup>3</sup>。また、白石克孝らは、まちづくりの活動が、経済的繁栄や規模の拡大志向から、環境活動・社会的活力を兼ね備えた地域社会の豊かさの実現へとシフトしつつあり、またまちづくりの主導権と責任が行政の独占を離れ、地域社会の住民や企業など多様な主体がそれぞれ必要不可欠な役割を演じることによって地域社会全体の公共性が担保される地域社会システムへ転換するという流れがあると述べている<sup>4</sup>。

一方、社会の新しい動きとして、社会的価値観をもって働くという「社会起業家」という概念が昨今世界中で注目され始めている。社会起業家とは、医療、福祉、教育、環境、文化などの社会サービスを事業として行う人々のことを言う<sup>5</sup>。社会起業とは英語のSocial Entrepreneurshipを和訳したもので、「社会福祉」と「ビジネス」という相反するふたつの言葉を合わせた造語である。それまでのチャリティやフィランソピーと呼ばれる「お恵み」では、社会的弱者を救う根本的解決にはならないという視点に立ち、福祉の分野に先鋭的なビジネス戦略と的を射たビジョン、効率を重視するマネジメント手法を持ち込んで、様々な社会問題の解決を図るものである<sup>6</sup>。こうした社会起業家のアプローチが今、単に社会福祉のあり方を変えるものだけではなく、21世紀型の新しいビジネスモデルであり、更に新しい生き方として注目されている。そして国内外問わず、社会や環境や人権など、地球規模の課題や地域社会が抱える問題を、事業を通して解決してゆこうとする動きが広がっているのである。例えばアメリカではホームレスの住宅と職業訓練の場を創出しつつ自立を支援し、同時に資源をうまく活用することでしっかりした経営基盤を築くといった事業が展開されている。日本でも、高齢化が進む山村で、高齢者でも無理なく出来る産業を生み出し、村に活気と潤いをもたらした事業が注目を浴びている。

社会起業家に関する先行研究では、まず町田洋次が社会起業家を時代を担う新しい生き方・働き方であるとして提案し、ボランティアの活動よりさらに創造的で広がりのある社会起業家が、プロフェッショナルとして地域社会の担い手になる必要性を説いた<sup>7</sup>。また斎藤慎は、社会責任投資の高まり、企業とNPOのパートナーシップといった新しい動向を捉えながら、アメリカ・日本の社会起業家の生き方を紹介し、単に収入を得る手段としてだけでなく、自己実現のために、そして環境・人権などの課題

---

<sup>3</sup> 田村明『まちづくりの実践』岩波新書、1999年

<sup>4</sup> 白石ら、前掲書

<sup>5</sup> 町田洋次『社会起業家―「よい社会」をつくる人たち』PHP新書、2000年

<sup>6</sup> 渡邊奈々『チェンジメーカー 社会起業家が世の中を変える』日経BP社、2005年、p.12

<sup>7</sup> 町田、前掲書

に使命感を持って働くという社会起業家の意義を唱えている<sup>8</sup>。

この中で筆者が注目しているのは、起業家らが持つ社会起業家的思考と行動である。規模の大小に関わらず、彼らの持つ思考や行動に共通しているものは、「社会に対して自らが気づき、自分のこだわりや問題に感じたことを発端として行動を起こす。個人としての感覚を重視し、自分に対しても相手に対してもそれぞれの価値観を重視し、認め合う姿勢をもつ。そして、その感覚を持って主体的に行動を起こし、仲間を増やしていく。そしてそれが彼らのライフワークになっていく」というものである。行政からでも企業からでもない、他でもない個人ひとりひとりが、お客様の市民ではなく、行動する市民である、ということである。このような思考は、これからの未来的な「まちづくり」の流れに合致するのではないだろうか。

筆者は、これからのまちづくりは、行政主導から市民参加のまちづくりへの動きが発展し、そして市民ひとりひとりの意識を起点とするまちづくりに変化していくのではないかと考えている。そしてその過程において、この社会起業家的な主体的で積極的な考えが、将来の日本や世界のまちづくりに大きな影響を与える可能性が極めて高いと考えており、本稿はその可能性を明らかにすることを目的としている。

本稿の構成は、第一章で日本におけるまちづくりのこれまでの変遷とその意義について述べる。第二章では社会起業家の概念とそれが社会に及ぼした影響について説明していく。第三章では実際に日本で社会起業家や社会起業家的思想を実践し、育てる試みをする実践について紹介する。そして終章では、まちづくりにおける社会企業家的思考の有用性やその将来性について論じていく。

---

<sup>8</sup> 斎藤慎『社会起業家－社会責任ビジネスの新しい潮流』岩波新書、2004年

## 第一章 まちづくりの流れとその意義

まず、始めにまちづくりとは何かについて述べていきたい。「まちづくり」という言葉は近年、ブームと言われるほど様々な場面で使われ、その概念は変化、多様化してきているので、明確に定義することは難しい。この言葉が生まれた当初は、都市計画やそれに関連する事業がまちづくりと言われてきた。次にまちおこしやイベントなどの地域の活性化につながることもまちづくりと呼ばれるようになった。そして現在は仕組みづくりや人づくりもまちづくりと呼ばれるようになり、ハード面からソフト面の意味まで含むようになった。また地域や地区レベルでの意味から国土計画のような広域的な意味を含めて使われることもある。また、「まちづくり」の「まち」は、「街」「町」「まち」などと表記できるが、一般的に「街づくり」は市街地などの街をつくる場合に用いられ、「町づくり」は自治体としての町をつくる場合に用いられ、「まちづくり」はソフトな意味を含めて幅広い意味で使う場合に多く用いられている<sup>9</sup>。

本稿でも、「まちづくり」をあらゆる観点から住み良い地域を生み出す活動として統合的に捉え、広義の意味を含むものであるとして、特に必要がある場合を除き、ひらがなで「まちづくり」と表記する。

### 第一節 まちづくりの始まりと変遷

第一節では、日本の「まちづくり」の始まりとその変遷について述べる<sup>10</sup>。まず「街づくり」という言葉は1962年の名古屋市栄東地区の都市再開発市民運動においてはじめて使われ、都市計画への住民参加の道を開いた。「街づくり」ないしは「町づくり」という言葉が一般用語として登場するのは、1970年代前半、区画整理による道路拡張やマンション建設にともなう日照権の侵害などへの反対運動が起きたときである。これらの言葉はそれらの運動の旗印として用いられるようになった。その後、コミュニティセンターなどの施設づくり、地区レベルの再開発計画づくりなどの活動が全国的に累積してきたとき、「街づくり」という言葉は住民の身近な居住環境整備に向けて、住民の多様なニーズをくみあげ、計画への住民の参加をうながすものとして使われるようになったのである。

「街づくり」ないし「町づくり」という言葉と、ひらがなで表記する「まちづくり」という言葉を明確に使い分けるようになったのは、1970年代後半になってからのことであり、そのころになると、大都市地域のいわゆるインナー・エリア（内部市街地）では、衰退し

---

<sup>9</sup> 三船康道+まちづくりコラボレーション『まちづくりキーワード事典』学芸出版社、2002年、p.3

<sup>10</sup> 以下は、延藤安弘『まちづくり読本』晶文社、1990年、p.9-10による。

つつある地区の再生をめざして、住民自らが地域の内側からその環境を作り変えていこうという計画的活動がおこなわれるようになった。そこでは、器としてのハードな環境（もの）にはたらきかけていくだけではなく、住民の健康・福祉・教育・コミュニティの形成など、よりソフトな領域（生活）をも視野に入れられるようになっていったのである。

1980年代の特徴は、「まちづくり」の個性化が強調されたことである。横浜市などがはじめた美しい景観を生かした個性ある都市づくりの理論と実践は、全国の自治体に大きな影響を及ぼした。個性あるまちづくりを支えるものとして、地域に内在する、あるいは住民各層がいただく固有の価値に着眼し、その価値を高めていくことの重要性が主張されていた。

## 第二節 近年のまちづくりの動きと展望

90年代以降も、確実に「まちづくり」という言葉は広く浸透していった。やわらかく親しみやすいイメージを持つことから、行政の側までも、「まちづくり」という言葉をさかんに用いるようになっていった。一方、行政に依存する地域づくりから、市民と行政との協働や、市民主導の地域社会への転換を実現するものとしての「まちづくり」の動きも依然として増え続けている。1998年に成立した特定非営利活動促進法（NPO法）によって、市民の協働による主体的な活動を支援する制度ができたことも、市民主体のまちづくり活動を後押しした。

近年の研究では、田村明が「まちづくり」の意味と仕事を解説する中で、新しい時代の「まち」は市民の自覚と責任でつくってゆくべきであるとし、それを呼び起こす用語が「まちづくり」であると述べている<sup>11</sup>。また「まちづくり」は都市や地域が自ら主体性をもち、地域文化、風土を大切に、誇りと愛着をもてる個性と文化性のある「まち」をつくっていくことであると述べている。また白石らは、現代のまちづくりは新たなパラダイムの時代に入ったと主張している<sup>12</sup>。それはすなわち、第一にまちづくりの活動が、経済繁栄や規模の拡大志向から環境・経済活動・社会的活力を兼ね備えた地域社会の豊かさの実現にシフトしつつあるということ。そして第二に、まちづくりの主導権と責任が行政の独占を離れて地域社会の住民や企業など多様な主体に振り分けられ、それぞれが必要不可欠な役割を演じることによって地域社会全体の公益性が担保される地域社会システムへと転換していくということである。

また、新しいまちづくりの手法として、地域の抱える課題を市民が主体となってビジネスとして解決する「コミュニティ・ビジネス」が知られるようになってきた。「コミュニ

---

<sup>11</sup> 田村、前掲書、p.33-37

<sup>12</sup> 白石ら、前掲書、p.5-6

ティ・ビジネス」は、1994年から細内信孝らが和製英語として使い始めたもので、「地域コミュニティで今まで眠っていた労働力、原材料、ノウハウ、技術などの資源を生かして、地域住民が主体となって、自発的に地域の問題に取り組み、やがてビジネスとして成立させていくコミュニティの活性化と、元気づくりを目的にした事業活動」と定義されているものである<sup>13</sup>。さらに細内は、これからの地域社会は住むところと働くところが一体化したまちづくり前提となると述べ、その職住が一体となったビジネスが「コミュニティ・ビジネス」であるとしている<sup>14</sup>。地域の人材、文化、風土といった資源を生かし、かつ自立型の地域社会を目指すこの「コミュニティ・ビジネス」は、市場主義社会の中で人間らしい生活を置き去りにしひとりあるきをし始めた経済活動に社会的意味を見出させ、人々の日々の生活に人間性を取り戻す手段となっている。この発想は次章に取り上げる社会起業家の理念にも共通するものである。

以上のように変遷を遂げてきた「まちづくり」であるが、これからはいかなる変化をしていくのであろうか。筆者はここに、社会起業家的な思考が大きく影響していくのではないかと考えている。第二章からは、その社会起業家とその仕組み、思考について詳しく述べ、それらのまちづくりにおける価値について論じていきたい。

---

<sup>13</sup> 細内信孝『地域を元気にするコミュニティ・ビジネス』ぎょうせい、2001年、p.5

<sup>14</sup> 細内、同上書、p.18-50

## 第二章 社会起業家と社会起業家的思考

### 第一節 社会起業家の発祥

社会起業家の発祥は、1980年代のイギリスあるいはアメリカであるとされている。斎藤慎、町田洋次らは、社会起業家という概念はイギリスにおいて、福祉国家に変わって自立型の福祉システムを構築していく存在、停滞した社会を活性化する存在として注目され、広がっていったとしている。一方、渡邊奈々の説では、「ソーシャル・アントレプレナーシップの父」と呼ばれるビル・ドレインなどがさきがけとなり、1980年代初めに米国で生まれたコンセプトが社会起業家であるとしている。

アメリカでベンチャー・フィアンソロピー<sup>15</sup>という社会福祉型ビジネスを支援する事業「アショカ財団」を創立したビル・ドレインの記事によれば、財団の基盤となるアイデアが生まれた背景は次の通りである<sup>16</sup>。

18世紀末に英国で起こった産業革命が世界に広まって以降、社会は消費・経済活動を行う「消費セクター」と呼ばれる部分と、教育や公共福祉、さらに環境など「社会セクター」と呼ばれる部分に分断された。この「消費セクター」と呼ばれる部分では、競争が激化する一方で、起業精神も活発になる。生産性を高めた企業には、より多くの富が集まるようになった。しかし消費セクターが力を強めれば強めるほど、税金に支えられてきた社会セクターは競争による進化と発展から取り残されてしまった。本来切り離されるべきではなかった、この「消費セクター」と「社会セクター」の断絶を取り除き、両セクターを融合すれば、各セクターの可能性は倍々に膨らんでいくはずなのである。

この「断絶されていた経済活動と社会活動を再び統合する」という試み、それが社会起業家の始まりである。人が生きる為に必要な収入と、福祉や環境、生きがい。そういった今まで分離して考えられていたものを、始めから総合的に捉えていこうとすることが社会起業家の根源的発想であるといえる。

### 第二節 社会起業家とは

#### 1) 社会起業家の定義

---

<sup>15</sup> Venture Philanthropy—社会起業向け投資のこと。ビジネスにおけるベンチャーキャピタルのモデルを社会事業や社会的な活動、NPOの支援に適用している。出資を寄付ではなく投資ととらえ、そのために明確な出資基準を設け、出資先にはマネジメントレベルの高さやプロジェクトの社会的な成果を求めている。

<sup>16</sup> 渡邊、前掲書、p.12-14より要約した。

このような背景で生まれた社会起業家という概念は、その後欧米から世界中に広がっていったが、現在の日本では社会起業家は次のように定義されている。

町田洋次は、社会起業家を「医療、福祉、教育、環境、文化などの社会サービスを事業として行う人たち」としている<sup>17</sup>。また金子郁容は、社会起業（ソーシャル・アントレプレナーシップ）とは「社会的なミッション（＝使命感）をもち、経済的リターンと社会的リターンの両方を追及する継続的な活動で、従来のビジネス手法を積極的に採り入れるもの」というのが一般的な定義だとしている<sup>18</sup>。

また、斎藤慎は、著書の中で、社会起業家の特徴を以下のようにまとめている<sup>19</sup>。

- ① 地域コミュニティや世界の多様なニーズに応える社会的な使命感を根底に抱きながらも、事業を实践する過程では、巧みにビジネス・テクニクを応用していく。
- ② 資本力は弱いながらも、時代を鋭くとらえたアイデアや創造性にあふれた組織を作る。
- ③ パートナーシップを重視する。縦割り型組織の弊害に悩まされる大企業や政府とは異なり、同じ価値観を共有する組織と有機的に結びつき、相乗効果を考えながら、目的を達成するためのネットワークを実現していく。
- ④ 労働を収入の手段としてだけでなく、自己実現の手段でもあると考える。
- ⑤ 事業の所在地の地元住民から、遠く離れた発展途上国の国民までを、利害関係者（ステークホルダー）と見なし、彼らの価値観に根ざした商品やサービスを提供する。株主に対する責任を最優先課題とし、利益を上げ配当した従来の企業指導者とは一線を画している。
- ⑥ 長期的な効果を重要視する。たとえ短期的な利益を犠牲にすることがあっても、長期的な恩恵を選ぶことで、最終的にはステークホルダーの満足が得られると確信している。

つまり、社会起業家の作る組織は、営利企業でもNPOでもよい。さらに言えば、社会起業家とは独立して会社をおこす人だけを指しているわけではない。NPOや行政の職員であっても、会社員であっても社会起業家とされることがある。組織のしがらみや偏った帰属意識のプレッシャーに負けずに、「社会をよくしよう」という志の下に、価値のある新しい仕事にチャレンジしてさえいれば、社会起業家である。環境保護、人権擁護、経済開発など、ローカルおよびグローバル社会にもたらす長期的な

---

<sup>17</sup> 町田、前掲書、p.18

<sup>18</sup> 金子郁容「ソーシャル・アントレプレナーとは何か」、渡邊、前掲書、p.206

<sup>19</sup> 斎藤、前掲書、p.28

恩恵を最優先にして、事業を確実に進めていく力。それが社会起業家に必要な条件である。

## 2) ボランティアとの違い・営利企業との違い

これまでの社会では、社会貢献活動といえばボランティア、というのが一般的に浸透していた考え方であろう。なぜボランティアではなく社会起業家なのか。また、普通の企業の創業者や、それを発展させる企業人と社会起業家とは何が違うのか。

ここで、社会起業家とボランティア、また営利企業との違いについて説明しておきたい。

まず、社会起業家とボランティアの違いは何か。イギリスのチャールズ・リードビーターによる社会起業家のケース・スタディの結論では、次のように述べられている<sup>20</sup>。

“大部分のボランティア組織は、動きが遅く、アマチュアで、人材や設備などの資源に乏しく、新しいアイデアも受け入れない。これに対し社会起業家は、柔軟かつフラットであることに加えて、創造的でオープンな組織をつくりだす。彼らは起業家精神を持っているので、ユーザー、パートナー、資金提供者との間に複雑でオープン、かつダイナミックな関係を築く。これらの活動を通して、彼らはさらに優れたアイデアや人材、資金を獲得し、活動の範囲を拡大していく。ボランティア組織の活動が、特定の目的に限定され、外部とのネットワークもそれほど大きくないのに対し、社会起業家の活動は、とどまることなく発展しつづけるのである。”

また金子郁容は以下のように述べる<sup>21</sup>。

“いわゆるボランティア活動とのはっきりとした違いは、ソーシャル・アントレプレナーは、冷静かつ現実的なアプローチをとることによって、社会問題に対するひとつの“ソリューション”を提供することだ。”

さらに、NPO法人ETICの代表理事である宮城治男は、社会起業家についてのインタビューで次のように答えている<sup>22</sup>。

“日本人の考える「ボランティア」とか「社会貢献」は、あくまでも本業が他にあって、その中で、空いている時間やお金を使って参加するというイメージが一般的ですね。ボランティアとアントレプレナー、何が本質的に違うか。P・

---

<sup>20</sup> 町田、前掲書、p.23

<sup>21</sup> 金子、前掲書、p.208

<sup>22</sup> 『Matrix』Vo.026、02/05/2002、「社会起業家という生き方 02. 宮城治男インタビュー」  
<http://hotwired.goo.ne.jp/matrix/0202/002/textonly.html>

ドラッカーはアントレプレナーとそれ以外の人と何が違うか、ということで「リスクを負った挑戦者」であるということを挙げています。ソーシャルアントレプレナーは、そこに本当に問題があると感じるなら、それを事業として収入を得つつ、リスクテイクをして本気で人生をかけてチャレンジしていきます。そこに壁が壊され、道が開かれて、多くの人をその活動に巻き込む求心力が生まれてきます。本気のコミットメントとしっかりとしたマネジメントにもとに事業を行うアントレプレナーでなければ、社会を変えていくようなインパクトには、よほどの天才でない限り繋げられないです。そしてそこから生まれるインパクトは、自らの利益のみを考えたビジネスからは生まれないものです。”

つまり、社会起業家は、従来のボランティアと比べて発想も行動にも柔軟性があり、ネットワークが広い。社会問題に対して現実的に対応する視点を持ち合わせている。そして、リスクを負ってでも、本気で取り組んでいく挑戦者であるという点で、ボランティアとは一線を画しているのである。

次に社会起業家とその他のいわゆる普通の起業家・企業人との違いについて説明する。町田洋次の解説によればこれらの違いは次のとおりである<sup>23</sup>。どちらも起業家精神を抱いているという点では同じであるが、第一の違いは、対象となる分野である。社会起業家は医療、福祉、教育、環境、文化などの社会消費を対象にしている。第二に、主たるステークホルダーが違う。普通の起業家や企業人の第一ステークホルダーは株主であるのに対し、社会起業家の最大のステークホルダーは地域の人々で、その人たちに快適な社会的サービスを提供することだけを考える。社会起業家には、利益を極大化して株主のような顔の見えないステークホルダーに分配するという感性がない。第三に、関係者の数である。社会起業家の場合はオープンな関係を目指しているので、その関係者は圧倒的に多い。（ただし町田は、普通の起業家・企業人といっても広い幅に分布しているので、その幅の広さによってそれらと社会起業家との距離は近かったり遠かったりすると補足している。）しかしやはり、収益を第一に考えているか、社会的使命達成を考えているか、その違いが基本的な社会起業家とそうではない人々の決定的な違いであると言えるであろう。

### 第三節 社会起業家のインパクト

#### 1) アメリカにおける社会起業家活動

次に、実際の社会起業家の活動について触れていく。アメリカは前述のビル・ドレインのアショカ財団をはじめ、様々な分野で社会起業家の活動・実績は多く、規模も

---

<sup>23</sup> 町田、前掲書、p.87

大きい。社会起業家の先進国であるといえるであろう。そのいくつかの例を紹介したい<sup>24</sup>。

まず、世界的アイスクリーム・ブランドの「ベン&ジェリー」は、ビジネスを通じて社会問題に取り組む「価値主導のビジネス」を実現し、社会から広く評価を受けている。例えばホルモン成長剤を与えないで育てた牛の牛乳を使用する、NPOのイベントでは無料でアイスクリームを提供する、そしてホームレスの人の社会参加を助けるために店を職業訓練の場として提供するなど、興味深い実績をいくつも挙げている。「己の欲するところを人に施せ。もっとビジネスらしく言えば、持ちつ持たれつ」というのが、創業者ベンの言葉である。

また、ホームレス支援NPO「コモン・グラウンド・コミュニティ」の創業者、ロザンヌ・ハガティもユニークな社会起業家である。ロザンヌは大学卒業後、教会でホームレス支援の為にボランティアとして働いた経験から、お恵みの食物で日々をしのぐホームレスの状況を根本的に変えたいと考えるようになり、ホームレスの人々の住宅や福祉を支援する活動を始めた。まず麻薬売買や殺人など、犯罪が多発するニューヨークで、ホームレス地獄と呼ばれていたタイムズ・スクエア・ホテルを改装し、ホームレスと年収3万ドル以下の低所得者向けの、米国初のアパートメントとして再生した。入居者はホームレスの他に、低収入のHIV感染者、精神病歴のある者、そして高齢者に限られ、収入がある者はその3分の1を賃料として納める。アパートメント内では他の非営利サービス団体と組んで、精神科によるカウンセリング、医療全般の診療、職業訓練などが行われている。このアパートメントが開業した結果、周辺の犯罪率は殺人100パーセント、窃盗80パーセント、婦女暴行64パーセントも減少し、地価も高騰した。その後コモングラウンドは、高い経営手腕を発揮しながら同様のプロジェクトをいくつも手がけ、そのノウハウは国際的にも広がりつつある。

更にコモングラウンドが前述のベン&ジェリーと共同で手がけるプロジェクトも興味深い。タイムズスクエア内をはじめ、4店舗をベン&ジェリーからフランチャイズ料金なしで運営している。同社からは無償の経営支援も受けている。これらの店舗はホテル住人の自立を支援する職業訓練所としても機能している。このうちタイムズスクエアの店舗は開店初年の1994年度、48万ドルを売り上げ、住人の給料23万ドルを賄ったうえ、コモングラウンドへの寄付も達成した。2000年には、ベン&ジェリーの全フランチャイズ店から成績のよかった店に贈られる「オペレーター・オブ・ザ・イヤー」を獲得するまでに成長している。この成功から学んだベン&ジェリーは、その後、NPOとのパートナーシップで展開するフランチャイズ形態を「パートナーショ

---

<sup>24</sup> 斎藤、前掲書、p.12-27 渡邊、前掲書、p.55-63

ップ」と呼んで正式な事業の柱に加え、特に青少年の職業訓練を重視するかたちで発展し、アメリカ国内各地に広げている。

これらの例のほかにも、同国では福祉、メディア、金融など多分野にわたる例が知られており、それらがアメリカ国内及び国外に与えたインパクトは決して小さいものではない。

## 2) 日本における社会起業家活動の拡がり

日本国内での社会起業家についても見ていきたい。日本において、社会起業家という概念の歴史は浅い。初めて「社会起業家」を主題として扱った町田洋次の『社会起業家―「よい社会」をつくる人たち』は2000年に発行されたが、「社会起業家」という言葉が一般に認知されるようになったのはこの頃からであるとされる。経済が発展してゆく中で蔓延してきた企業への絶対的な忠誠や画一主義、利益・効率至上主義、地域社会の崩壊による孤立化などに疑問を持ち、社会貢献や自分の人生の価値について目を向け始めた人々の中で、社会起業家という概念が徐々に注目を浴びるようになっていった。

元々、日本には社会起業家精神というものは存在していた。例えば明治・大正時代の実業家、渋沢栄一は「道德経済合一説」を唱え、道德観と事業で利益を出すことを一致させていく形を理想としたが、これは非常に社会起業家的な発想である。渋沢は、「私利私欲だけでは結局全体も自分自身もだめになってしまう。私益を追求するにも道義や公益とのバランスも不可欠だ。」と説いている<sup>25</sup>。貧民救済の病院を創設した高松凌雲や、専門的障害児教育を展開した古川太四郎なども、明治時代の社会起業家の先駆者として紹介されている<sup>26</sup>。一方、現在社会起業家の仕事として紹介されている事業には、秋山をねが創立した社会責任投資（SRI）の為の調査・評価を行う「インテグレックス」<sup>27</sup>、知的障害者施設こころみ学園の入園者と職員がワインの醸造・販売をする「ココ・ファーム・ワイナリー」<sup>28</sup>、イチゴ農家の主婦らによる規格外の

---

<sup>25</sup> 渋沢栄一（1840-1931） 明治・大正の実業家。日本に株式会社（合本組織）を導入。設立した第一国立銀行を足がかりに、王子製紙・大阪紡績・東京瓦斯など約500社の設立や商工会議所・銀行集会所の創設に関与、日本資本主義の発達に大いなる貢献をした。NPO法人ETIC。編『STYLE』創刊号、2004年、p.23

<sup>26</sup> 町田、前掲書、p.178-184

<sup>27</sup> 渡邊、前掲書、p.44-53

株式会社インテグレックス HP <http://www.integrex.jp/>

<sup>28</sup> ETIC、前掲誌、p.21

COCOFARM&WINERY HP <http://www.cocowine.com/index.html>

イチゴを使ったケーキ販売を行う「風工房」<sup>29</sup>などがある。これらを始め日本で知られる社会起業家活動は、企業の社会的責任を追及するものから社会福祉、地域振興、子育て支援事業まで様々であるが、そのほとんどが元々「社会起業家」という言葉を認知していたわけではなく、一個人が社会に対して抱いた好奇心や疑問に対して個人の発想と行動力で解決していった結果、後から社会起業家と呼ばれるようになったというものが多い。

「社会起業家」という概念が一部の人々から徐々に浸透し、それを目指す形の活動が見られるようになったのはごく最近のことである。その中で現在広がっている、日本で社会起業家を看板に掲げ育成していこうとする人々の事例を、次章では更に詳しく紹介していく。

---

<sup>29</sup> NPO法人ETIC. 編『好きなまちで仕事を創る』、TOボックス、2006年、p.54-55

## 第三章 社会起業家的思考と活動の拡がり

### 第一節 特定非営利活動法人エティックと社会起業家支援活動

特定非営利活動法人エティック（以下、E T I C.）の活動は、日本における社会起業家育成の先駆けと言える。E T I C. は、次世代を担う起業家型リーダーの育成・輩出を目的にし、起業家を志す若者に対し、様々な実践と成長の機会を提供するN P Oである<sup>30</sup>。E T I C. とはEntrepreneurial Training for Innovarive Communitiesの略であり、1993年に現在のE T I C. の前身となる「E T I C. 学生アントレプレナー連絡会議事務局」として設立されたのが始まりである。

ベンチャー企業やN P O、大手企業の新規事業部などで、学生が責任のあるポジションにたち、事業の成功に貢献することを目指して取り組む「長期実践型インターンシップ」（97年～）を運営する他、社会起業家を志す若者の事業プランコンペティション「S T Y L E」（02年～）、社会事業を立ち上げる若者を支援する「N E C社会起業塾」（02年～）、地域に根付いた若者の挑戦機会を創り出す事業を応援する「チャレンジ・コミュニティ創成プロジェクト」（04年～）などを実施している。

これらの活動の内、「S T Y L E」というビジネスプランコンテストは、日本で初めての社会起業向けのビジネスプランコンテストとして社会に強いインパクトを与えるものであった。これは社会問題に事業的手法を活用して取り組むビジネス・N P O・プロジェクトのプランを募集し、そのプランの選考の過程でそれを具体化する支援を行うというものである。ここではブラッシュアップコンテストと呼ばれる形式が用いられている。書類審査を通った応募者は、メンターと呼ばれる各分野のプロフェッショナルや他の参加者と交流し、アドバイスなどの支援を受けながら、共に事業のブラッシュアップを図る。夢見ることだけに終わらせず、実際の社会に少なからず影響を与え、価値を生み出す、より現実的な事業へと洗練させてゆくのである。応募者の取り上げるテーマは多岐に及んでおり、過去の例では、エクアドルでの原体験に基づく、フェアトレードを通じた森林保護の取り組み、全国で大量に廃棄される中古自転車のペンキ塗りによる再生と塗装体験を通じた教育事業、大学生が使っている教科書の再販事業などがある。彼らはS T Y L Eでの経験をステップにし、その後もそれぞれ事業の発展に挑み続けている。

その他の社会起業家支援事業としては、N E C（日本電気会社）をパートナーとす

---

<sup>30</sup> 以下、E T I C. の活動内容についてはETIC.HP <http://www.etic.or.jp/>、ETIC.編『S T Y L E』、前掲誌、ETIC.編、『好きなまちで仕事を創る』、前掲書、を参考にまとめた。

る、「NEC社会起業塾」がある。立ち上げから最初の成長に向けて重要な局面を迎える社会起業家の3～5団体を選考し、半年の間、個別のニーズに応じた機会やネットワーク、リソースなどの提供を行うというプロジェクトである。また「チャレンジ・コミュニティ創生プロジェクト」は、ETIC.が財団法人ベンチャープライズセンターの委託を受けて実施している事業である。地域・社会の新規事業創出・課題解決の現場に次々と若者が参画し、彼らとその担い手として育っていくという文化と仕組みを日本各地に広げることを目的としたもので、具体的には、そのような文化と仕組みを持つ地域を「チャレンジ・コミュニティ」と呼び、その地域で人材育成を展開する団体に対する資金面・ノウハウ面のサポートを行っている。

ETIC.がこのような活動を通じて社会に伝えたいメッセージは何か。それは「全ては個々人の問題発見から始まり、共感のネットワークを通じて徐々にネットワークを通じて徐々に認知を広げていく<sup>31</sup>」ということである。例えば前述のビジネスプランコンテスト「STYLE」ではブラッシュアップコンテストという形式をとっているが、これはアイデアや想いを抱えていながらもビジネスノウハウを持たない‘ごくありふれている普通の人’が夢を見ることだけに終わらず、個人の問題意識を、実際に社会に価値を生み出すことが出来るものまでに育ててゆくというねらいがある。ETIC.が最も重視しているのは、まず個人個人がひとりの市民として、それぞれ問題意識を持ち、声に出し、実行するという行動力につなげていくということである。ETIC.理事であるアレン・マイナー氏は次のように述べている<sup>32</sup>。

“ソーシャルベンチャーは、社会の中に豊かなライフスタイルを提案していません。“人生は一つに決まりきっていない、無限のあり方がある”と。あなた自身が社会にどう貢献するのか、どのような役割の人生を生きるのか、それぞれが自分の付加価値や夢を表現する方法は無限にあるということ、STYLEでは具体的に目に見える形で伝え、励ますことができると考えています。それに、アントレプレナーは起業家だけではありません。誰にも、自分だからできることがある。あなたの仕事や生き方を通じて、たくさんの人を励ますことができる。また、そんなあなたに共感し一緒に動いてくれる仲間を大切にしたいと思っています。”

## 第二節 名古屋における社会起業家支援活動－ Will Platform

---

<sup>31</sup> 井上英之「ソーシャルアントレプレナーと政策」『政策空間』、2003年より抜粋  
[http://www.policyspace.com/archives/200312/post\\_136.php](http://www.policyspace.com/archives/200312/post_136.php)

<sup>32</sup> ETIC.編『STYLE』、前掲誌、p.25

次に、東海地区におけるE T I C. モデルを目指して生まれた社会起業家の活動について紹介していきたい<sup>33</sup>。岡田敏克氏が世話人を務める「Will Platform」は、東海地域において、「社会的課題を事業（ビジネス）として解決する」「仕事を通じて社会に貢献する」ことをめざす、ソーシャルアントレプレナー（社会起業家）的な生き方・働き方の普及を目的としたプロジェクトである。持続可能な「生き方・働き方・暮らし方」を志向する人々が集い、支えあい、学びあう、“あたたかいコミュニティ”を目指している。主な活動内容は以下の通りである。

#### ①研鑽・交流・コミュニティづくり

毎月1回、勉強会と交流会を目的とした「ソーシャルアントレプレナーのための交流空間（S V - C a f e）」を開催。社会起業家的発想で行動するゲストによるスピーチとワークショップによるディスカッション、そして参加者同士の交流などが行われている。

#### ②情報発信・情報交流

ウェブ「持続可能な暮らし+社会起業家+LOHAS→21世紀型コミュニティ（<http://will-p.seesaa.net/>）」を運営、社会企業にまつわるさまざまなトピックを掲載している。また、メンバー相互の情報交流の場として、メンバーリングリストを運営している。

#### ③個別相談・活動支援・コーディネート

参加団体（個人）に対する相談やコンサルティング、ネットワークを生かした団体相互の連携コーディネートなどを行っている。

#### ④研究会の開催

持続可能な社会のあり方を考える「サステナブルなミライを考える研究会」を開催している。

### 1) ウィルプラットフォーム発足と発展

ウィルプラットフォーム（以下ウィル）は、それまで行政の調査・研究機関の研究員であった岡田敏克氏が、地方自治体の実行力に限界を感じ、社会を変えていくには事業レベルで変えていく必要があると考え、社会起業家という概念と出会ったことから始まった。岡田氏は前述のE T I C. や他の起業家、起業支援者などとの交流を経て、2002年、後のウィルの基本構想につながる「ソーシャルベンチャープラットフォーム

---

<sup>33</sup> 以下は、ウィルプラットフォームの資料、HP及び12月19日岡田敏克氏に対する筆者のインタビューに基づく。尚、筆者のウィルプラットフォームイベントへの参加経験から知った事実も含まれる。

ームプレ研究会」という勉強会を3回ほど開催した。それから1年半程の休止期間の後、2004年1月、名古屋大学院生であった戸上昭司氏と共にウィルプラットフォーム立ち上げを決意、準備を開始する。そして2004年11月3日、ETIC.の井上英之氏や、日本で活動する社会起業家を招いて開いたイベント、「スタートアップ・トークセッション」をもってウィルプラットフォームとしての本格的な活動が始まった。その後勉強会や交流会、情報発信を定期的に重ねていったが、メンバーによる紹介やマスコミの記事などによって徐々にネットワークを広げ、岡田氏と戸上氏の2名で発足させたこのプロジェクトは現在までにメーリングリスト参加者88名、イベント延べ参加者数352名までに広がっている<sup>34</sup>。プロジェクトの参加者は、社会的活動に関心のある学生から主婦、経営者、会社員など様々である。

現在ウィルのメンバーが行っている事業には、レクリエーション活動を通じて犬の殺処分をなくし犬と人との共生社会を目指すNPO法人ドッグ・レクリエーション協会<sup>35</sup>や、愛知県十四山村で有機栽培・無農薬栽培を行っている株式会社M-easy<sup>36</sup>、環境に配慮した藁による建築活動を行うストローベイルプロジェクト<sup>37</sup>などがある。しかし現在の時点で、それらの事業はまだ事業としての十分な収益を上げ、採算をとっていくまでには至っていない。有志やボランティアの域を完全には脱していないのが実情である。しかしこのような事業はこれからの未来型事業として市民活動のイベントで紹介され、マスコミに取り上げられるなど、着実に社会から注目を集めつつある。

## 2) 手放して場を開放する

ウィルの活動の中で、世話人である岡田氏が心がけていること、それは、世話人はなるべく「何もしない」、なるべく「ルールを作らない」ということである。イベントの呼びかけをしても、参加しなければいけない、という義務ではなく、「興味がある人が参加してください」。メーリングリストの文章も、「興味がある人、暇な人だけ読んで下さい」と書かれていることが多い。勉強会でも、日時と会場の用意と、プ

---

<sup>34</sup> 2005年12月20日現在。2004年スタートアップ・トークセッション、ソーシャルアントレプレナーシップ養成講座、SV-Cafe vol. 1～vol. 11、サステイナブルなミライを考える研究会第1回～第5回、社会起業家のためのブログ講習会、1周年記念トークセッションの総計。

<sup>35</sup> NPO法人ドッグ・レクリエーション協会 HP <http://www.dog-rec.com/>

<sup>36</sup> 株式会社M-easy HP <http://mt14measy.exblog.jp/>

<sup>37</sup> 藁の家HP <http://blog.goo.ne.jp/wara-styl/>

また、「藁の家」は、前述のETIC. ビジネスプランコンテスト「STYLE2004」に応募し、特別賞を受賞している。

レゼンターを招くといった準備とある程度の道筋はつけることはするが、それ以上に参加者の意見交換や交流といった時間をとるなど、場づくりの大半は参加者に委ねられている。その日その時間、自らの判断で目的を持って参加することを決めた参加者が集まって、自然に、勝手にその場を創り出す。但し、メンバーの意見や提案には、世話人や感じることのあった他のメンバーのフィードバックが必ず返ってくる。義務にしたり、ルールで縛り付けたりすれば、その場は格段に新鮮度を失い、活気を失ってしまう。世の中も、人も場も生き物のように常に日々変化していく。その時その時にベストなものも、日々変わっていくのである。だから、その都度その都度に共にベストなものを創る。「決められていたら、やることなんてない。ちょっと足りないくらいの方がいい」と岡田氏は言う。

参加やノルマなどの義務がない、与えられる役割がない。世話人は「何もしない」。やめようと思えばいつでもやめられる。そのようなウィルという場であるが、その場は衰退していくどころか、自然とメンバーの能動的な意思によって日々変化しながら生き続け、発展している。その時ウィルという場所を必要とする人が、ウィルという場に期待を持って能動的に参加し、一緒に自由に可能性を広げていく。敢えて参加者に任せる。それがかえって能動的で前向きな参加者を増やし、ウィルを発展させ、成長させることになっているのである。

### 3) メンバーにとってのウィル

それでは、ウィルに参加するメンバーにとって、ウィルはどんな存在とされているのであろうか。筆者がウィルのメンバーに問いかけてみたところ、様々な反応が返ってきた。以下にその一部を簡単に紹介する<sup>38</sup>。

- ・ 『木』のような存在。葉はいろいろな形・色・大きさをしているばらばらだけれど、1枚1枚は枝でつながって、大きな幹を構成していて、根は同じ。木に実がなれば、実が落ちて芽生え、新しい木に育つこともある。
- ・ 暖かい場であり、プラットフォームそのもので、そこからまた充電や発散をして、再出発できる場。
- ・ 充電出来る場所、進む方向を再確認できる場所、不思議な力で繋がる仲間の集まる場所。
- ・ 何気なくしゃべりたくなった時に立ち寄れる「シャベリバ」。

---

<sup>38</sup> 2006年12月に筆者が代表者の許可を得てウィルのメーリングリストにて投げかけた「あなたにとってウィルとは何ですか」と問いかけに対し、メンバーからメールにて回答を得たものを要約した。

- ・ 落ち着ける場所、ひだまりのような場所。  
なんとなく楽しい、なんとなく落ち着く、なんとなくワクワクする、なんとなく元気になる。  
今までの人脈のから、ひとつ越えた新しい人脈の中に入っていける。つながることを求める人たちの場。
- ・ 勇気づけられるところ。みんながそれぞれに持っているワクワクや世の中を変えたいという気持ちを実際に行動に移している人たちがいる。
- ・ ウィル＝「温泉」。その効能は、自分の棚卸、人生の目的探し、やりたいことがわからない人に効果あり。
- ・ つながりは、ゆるやかに。強制、義務を感じないで参加できる。
- ・ 多様性を認めてくれる場所。それぞれの生き方を認め、自分の可能性を感じられる場所。  
受容される場所で、がんばらない場所。  
がんばらないからといって、甘んじているわけでもなく、個々のペースで個々の描く未来に向かっていく前向きさもある。
- ・ 元気なときに行くと、そんなにがんばらなくても落ち着かせてくれる。凹んでいるときに行くと、まあそんなこともあるよ、ぼちぼちいけばという気にさせてくれる。自分の一番、自分らしい立ち居地に戻してくれるペースメーカーのようなもの。
- ・ 人によってウィルの捉えかたは様々。ウィルの効能も人によって違う。  
様々な経験、価値観、考えを持っている人々が集まって、誰かが持ち出したテーマに対して様々なスパイスを加えて料理して、出来上がったものを一緒に楽しむことができるようなイメージ。

常にメンバーに委ねる姿勢であるウィルの特性上、メンバーのウィルの捉え方もメンバーによって様々であるし、それを統一する必要性はない。しかしそれを前提として、強いて共通するものとしてまとめるならば、メンバーにとってウィルは、個々の生き方が認められる場、落ち着ける場であり、同時に未来への可能性を感じられる場としての役割も果たしていると言えるであろう。

#### 4) 信頼できるコミュニティ

そして、岡田氏がウィルにおいて一番大切にしていること、それは「信頼できるコミュニティ」である。ウィルは「社会起業家を創出する」という目的を持って発足されたプロジェクトであるが、メンバーの中で実際に優れた経営の経験やノウハウを持っている人間の数は少ない。実際に何らかの事業立ち上げをしたり、立ち上げに関わ

っているメンバーの数も20人から30人程度である。その他のほとんどのメンバーは、現在アイデアを温めていたり、テーマを探しているといった模索中の段階である。つまりここに集まる人々の大半は、大きな力などは持ち合わせていない、云わば普通の人々なのである。しかし、社会に対して問題意識を持ち、自分も何かしたい、行動したいという意識を持ったメンバーが集まっている。ひとりひとりが特別大きな力を持っていなくても、それぞれの人生経験の中で得ているそれぞれ特定の分野で経験や知識、人脈がある。それらをみんなで出し合えば、大きな力になり、結果、大抵のことは何でもできるようになる、というのがウィルの考え方である。特別な能力を持った特別な人がやるのではなく、普通に生活している普通の‘私’でも、仲間と集まることによって社会にアクションを起こすことができる、そういった意識を持つことが大きな力であり、価値である。その為に必要になるのが「信頼できるコミュニティ」であり、ウィルはそのような場をつくることを最も大切にしている。

ではウィルの目指す「信頼できるコミュニティ」とは何だろうか。ウィルプラットフォームの‘W i l l’には、次のような意味が込められている。「よりよく生きる意志」、「よりよい社会をつくる」こと、そして「よりよい未来をつくる」ことである。人として良く生き、良い社会で暮らし、良い未来を想像して生きていきたいという自然で根源的な欲求。そうした「互いのよりよく生きる意志を認め合う」、そしてそれを一緒に形にしていこうという場が、岡田氏にとっての「信頼できるコミュニティ」であり、確かな形や力を持たないウィルプラットフォームの最大の強みである。

ウィルプラットフォームという信頼の場では、年齢も経験もバラバラのメンバーが一緒によりよく生きていきたいという願いを共有し、ほっと安心できたり、元気になれたり、自分も何か出来るかもしれないという可能性を感じられるようになる。そこから誰かと何かを一緒にしていこう、具体化していこう、そう考えられるようになるのである。

現代社会、日本においては食料、住居、交通機関などのモノの供給は十分に満たされている。しかし、よりよく生きよう、よりよい未来を創っていこうとする意識のインフラが圧倒的に不足している。忘れられた意識のインフラを満たす、そこに行けばほっとできる場、誰かと何かを一緒にする場、自分も何かできるかもしれないという可能性を感じられる場、それこそがウィルの本質である。

## 5) ウィルプラットフォームの今後

ウィルプラットフォームは2005年11月に1周年を迎えた。岡田氏は2年目以降、世話人として更に「何もしない」ことを決めている。月一回、ゲストプレゼンターを招いて開催していたS V - C a f eは、二週に一度に増やし、プレゼンターは用意しない。より多く交流の機会を増やし、そしてその時集まったメンバーの中でそれぞれが

持っている関心、提案を共有して、その時、そこに集まった人々の持っている最も新鮮なテーマを取り上げる。社会は日々変化し、人々の生活や価値観も日々刻々と変わっていく。場に柔軟性を持たせ、違う人同士が居心地よく共生できるよう形を変えながら続いていくことで発展していこうとしているのである。

新たに生まれるプロジェクトとしては、「株式会社だいじょうぶ。」がある。生きていく上で不安を抱えている、何か始めたいのに一歩踏み出せない、そういった人に対して「だいじょうぶ」な場を提供し、安心できて、背中を後押し出来る、そういった価値を提供するプロジェクトである。

先のメンバーへの問いかけに対するある回答の中で、このようなコメントが添えられていた。

“さて、さて、そんなウィルが今後、どう進化しているのか？私としては、参加者ができるだけ一つにまとまらず、好き勝手なことをして、外で得た様々な体験が自然と他の参加者にも影響しあっていくような広がりや許容量の大きなグループであって欲しいと思います。”

このように、「できるだけまとまらず、好き勝手なことしてほしい」と公言する集団が、一体日本で他にいくつ存在するであろうか。しかしこのようにそれぞれのばらばらな生き方を認め合うことが、ウィルの大切な要素なのである。だからこそ、信頼感でつながることが欠かせない。

ウィルプラットフォームというプロジェクトは今後も「信頼できるコミュニティ」を根幹に据えながら、前述の通り、あえて組織立ったものを作らず、社会や人々の状況やニーズに合わせ、柔軟に変化していき、その時その時のベストな資源を生み出していくであろう。

以上、社会起業家の新しい動きについての事例を紹介してきた。この社会起業家という生き方は、これらは現代社会に欠けているものを問いかけ、それらを取り戻し、なおかつ新しい価値も生み出していくものである。

これらの社会起業家的な思考は、そのままこれからのまちづくりにも繋がり、未来型のまちづくりを形づくる重要な要素ではないかと筆者は考えている。また別の視点から言い換えれば、このような社会起業家的な生き方を実践してゆくことで、自然と新しいまちを形成してゆくとも言える。行政による一方的な地域づくりにも、市場経済主義的な経済発展にも限界が見え始めた今必要とされるであろう、そうした新しいまちづくり将来性と提案を次章では論じていきたい。

## 終章 これからのまちづくりにおける

### 社会起業家的思考の可能性

これまで第一章では日本における地域のまちづくりについて見てきた。第二章、第三章では近年注目を浴び始めている社会起業家の概念を紹介し、事例を用いながらその考え方や生き方について述べてきた。最後に本章では、これまで紹介してきた社会起業家的な思考や行動の中から、これからのまちづくりを大きく変えうるであろう要素を取り上げ、論じていきたい。

#### 1) 毎日の行動の全て=生きること

まず、働くこと、モノを買うこと、売ること、食べること、全てが生きるということに繋がるという視点が重要であるということである。毎日の人間の行動は全て、生き方や社会や地域と無関係ではない。そもそも私達は、働く為に生きるのではなく、生きる為に働いているのである。日々、地域社会に生きるひとりひとりが、自分の生きる世界、国、地域をどうしてゆきたいのか、当事者意識を持つこと。「私利私欲で目の前の利益の為に働く」から、「共に自分の住みたい社会に生きる為に働く」へ。そして「組織の中で指示されるままに働く」から「自らの価値観で動く」へ。そういったひとりひとりの意識の変化が、これから地域社会を行政や大資本にまかせきりの状態から脱却させてゆくであろう。

#### 2) 現実的解決の視点

次に、社会起業家が持つ重要な要素は、あらゆる面からの持続可能性を考える、そして今できることから始めるという姿勢である。社会起業家は、その場しのぎの慈善活動とは一線を画している。ある課題に対して一時的に金銭やモノだけで埋め合わせるのではなく、そこに課題を解決する人を育て、そこに解決できる仕組みを作ることをまず考える。金銭的・体力的など様々な面で持続可能な体制を作り出すのである。また彼らは、理想を実現できると信じ追い続けながら、同時に「いま自分が、いまの社会で出来ること」を見つめ、行動する。急に大きなアクションを起こすことは不可能かもしれないが、その時は、小さなことから今取り組んでいく。何かを始める一歩を踏み出せないとき、それをやれない言い訳を考える前に、どうすれば出来るようになるかを考える。もしくは周りの人に相談をしてみる。少しずつの歩みでも、ゼロとは格段の違いであるし、その積み重ねが結果的に大きな力になってゆくのである。

地域社会においても、人材面、環境面、経済面などでそういった現実的解決の視点がより重視されるべきである。例えば知的障害者を受け入れる施設を作るの

ならばただそれだけでなく、そこに適切な働く場、本当の意味で生きる場を創り、価値を生み、自立できるようにする。例えば高齢者ばかりで産業もない村に事業を生み出したいと思ったら、まず周りの人にその考えを話してみる。または村にある資源を徹底的に調べてみる。そうして課題に取り組むことで、将来的に地域に自立してゆく力がつく。そして地域の発展の先延ばしを回避し、少しずつでも目指すところに確実に近づいていくのである。

### 3) 柔軟性をもつ

「場は生きものである。その時その時に最良のものを。」第三章で取り上げたウィルプラットフォームの基本方針のひとつである。なるべくルールをつくらない、義務にしないことによって、かえってその時と場に適したものが参加者から生み出される。

地域においても、同じことが言えるのではないだろうか。まちも、環境も、住む人の生き方も、常に変化を続けていく。その時その時に、自分が生活している地域社会で必要なものを見つめ、考え、その時に一番良いものをその時生きている人が決めていくことで、新しいまちが構成される。

### 4) 個の生き方・価値観を認め合うこと

最後に最も重要な要素として挙げるのは、個を尊重し、認め合うということである。まず自分の生き方・価値観を大切にす。自らの社会に対する問題意識から、ワクワクする気持ち、どうしてもやりたいという気持ち、何かを変えたいという気持ちなど、様々な自分の感性を無視せずに行動する。斎藤慎は、社会起業家の活躍は個人のこだわりが発端になっていると指摘し、「問題にこだわる意識」が個人を行動に駆り立て、やがて同じ思いを持った人同士がつながりあって潮流となり、最後には経済をも動かしていく、と言う<sup>39</sup>。また、第三章で取り上げたウィルプラットフォームでも、互いの多様な生き方を受容し合い、落ち着かせてくれる充電の場が、

個人のパフォーマンスを高めている。また、自分の生き方を肯定することで、次に周囲の人々に対する生き方も同時に肯定できるステップに進むことができる。認め、認められることでより一層人々のパフォーマンスは高まってゆく。

地域にとっても、このような個の多様性を認める姿勢、場は重要な役割を果たす。市民ひとりひとりの可能性を引き出すことができる。また地域に住む当事者である市民が、個人としての見方から地域社会を見、行動するようになると、自ずとその社会にとってその時現実的に必要とされるインフラが満たされるようになって

---

<sup>39</sup> 斎藤、前掲書、p.230

てゆくのではないだろうか。

これからのまちづくりは、行政や企業にまるきり依存するのではない。かといって孤立・孤独主義でもない。市民ひとりひとりが、個人意思による自由なヒトとのつながりの中で元気づけられ、それぞれのペースの中で前に進む。まちは、それに合わせて自然なペースで発展していく。

本稿では特に「まちづくり」という視点から論を進めたが、この社会起業家という概念は、人としての働き方、生き方、他人との関わり方など、更に広い場面においても同様に重要な提言を示している。豊かになった経済とは裏腹に、「生きる意味」が見出せない人々が存在する現代の日本で、この思考は新たな生きる道を見つける手掛かりとなる。

世界に生きる人々が、ワクワクした気持ちを持って積極的に生き、周りの人々と認め合い支え合いながら、自らの生き方・住まい方を自らで創り出す。そうして創られた地域社会が、人々にとって幸福に生きられる、これからの未来のまちになるのではないだろうか。